高崎市生涯学習フェスティバル　　令和２年12月５日（土）11：30～12：30
高崎市市民活動センター・ソシアス(市民ホール)

高崎学検定関連シンポジウム　２部

講演　演題「高崎らしさの民俗学」

～高崎城の縄張～

高崎市歴史民俗資料館 学芸員　大工原美智子

はじめに

山崎　一『群馬県古城墨址の研究』には、

高崎城即和田城ではない。高崎城は和田城の廃墟を含む地域に築かれたもので、実質的には別城である。…拡張や増改修が繰り返され、殊に井伊直政が箕輪城をここに移したことにより、全く変貌し、今はその形態を追推することはほとんど不可能である。…城郭を改修する際、既存の普請を抹消して工を起こすことの不利は勿論、そうすることは地盤を脆弱にする欠点もまねくので古い濠、土居がそのまま用いられるか、改造拡張されるのが通常であるが、井伊氏の城再築の場合は、

一、　城郭の規模が和田城時代とは格段の差があったこと。
二、　戦略態勢、経済状態や兵器及戦斗方式の急速な進展。
三、　和田城址西側は烏川に浸蝕され、崩壊をつづけていたこと。

等の事情により、和田城遺跡の一部（或は主要部）は西郭にそのまま放置され、高崎城の大部分はその東に築かれたものと考うべきである。

とある。高崎城は、天正18年（1590）に落城した和田城を東へ拡張する形で城を築き、慶長３年（1598）に井伊直政が居城を箕輪から高崎に移したのが始まりとされている。

1．高崎の原点　四神相応長久の地

四神の信仰は古代中国で誕生した。四神とは、東西南北の四方を守る守護神である。また、天には日月の**陰陽**があり**二十八宿**が、地には**五行**（東木、西金、北水、南火、中央土）の霊神が守って平安をもたらすという。霊神の「霊」は陰の精（精霊）、「神」は陽の精で、この**東西南北の四方にいる四神が相生**（相剋/相克=相互作用）している地形を**四神相応**といい、古くから都を選定し、**城郭を築く理想の地**とされていた。

四神相応の地とは、東に小河田沢があり、西に道があり、南に流水があり、北に山林がある地形である。南か東西に流水があるのは**長久の地**、**繁盛の地**、南が低く北が高いのは**黒竜の地**といわれ、四神相応の地勢が優れた**勝地**とされる。高崎城は、南北に長く東西に狭い微高地上にあり、東に小河田沢（湿地）、南に碓氷・烏の両河、西に小幡海道宮嶋道、北に榛名山と山麓の榛原の林がある高崎城は、正にこの**四神相応に叶った地形**なのである。

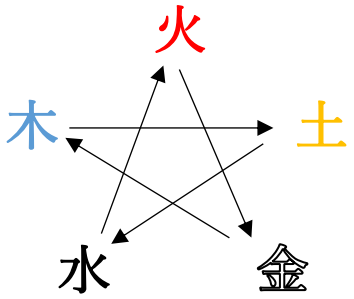
『無銘書』三十「御家事向大概　三十　高崎城大意」

○**『高崎城大意』**　17 世紀後半、高崎藩の軍学者山本十左衛門幸運が軍事的知見から高崎城を分析した書物『高崎城大意』を大河内家の初代藩主大河内輝貞へ上申して以来、高崎藩歴代の軍学者たちが高崎城を研究し、損壊や修理の不備を指摘または築城した先人の偉業を称え、高崎城大意を改訂して藩主へ報告し続けた。原本は既に失われており、幕末期に作られた写本が残る。　　山崎　一（1985）『高崎史料集』大河内家文書(無銘書 2)収録

＊**陰陽**　万物の生成消滅の変化は、陰と陽の互いに対立する二つの気（天地に生じる自然現象）によって起こる。

＊**二十八宿**　中国で定められた 28 の星座。天球を 28 の領域（星宿）に区分する。

＊**五行**　五行思想。中国の自然哲学「五行説」。万物は「木・火・土・金・水」の 5 つの要素からなり、相互作用しているという。それぞれに「青(または緑)・赤・黄・白・の黒（または紫）5 色が当てられる。



＊**四神相応**　風水における好適地の条件。知的景観が四神の存在にふさわしく優れた所。

＊**長久の地**　天地長久。「天は長く地は久し」とも読む。天地はいつまでも消えることがなく、物事が終わることなくいつまでも続くこと。平和や長寿、繁栄などがいつまでも続くこと。

＊**繁盛の地**　富貴繁盛の地。「東（青竜）に流水、西（白虎）に長い道、南（朱雀）に汗池、北（玄武）に山稜あり」という条件が整うと富貴繁盛の地いい、中国の家相学「営造宅経」に合致するといわれている。

＊**黒竜の地**　神聖な存在。**五行思想**において黒は北を示し、水に対応して、黒竜を玄武と同様、「北方を守護する神聖な竜」とする。竜は沼や池に棲むとされ、高麗を黒竜とすることもある。なお、高崎の北の砦となる榛名山のカルデラにできた榛名湖畔には高麗が祀られている。

＊**榛**　ハンノキ。古名は榛。カバノキ科の落葉高木。

2．名城の縄　陰陽の城

高崎城は、初め関西勢力である豊臣方との対立に備えて築かれた城である。＊**中仙道**の碓氷峠を固め、交通の拠点とするため、幕命により井伊直政が高崎藩を立藩し、江戸の西北を守る＊**境目城（前線基地）**として築かれた。境目城の任務は敵の侵入を阻止し、本城（江戸城）からの**後詰め（援軍）**が到着するまでの間、確実にもちこたえることにある。

城には陰陽があり、**持久防御を主とするものを「陰の縄」、攻勢防御を主とするものを「陽の縄」**という。この相反する２つの目的を同時に満足するのが名城の＊**縄**とされ、高崎城はこれをよく満していたという。つまり、三ノ丸は攻勢防御の陽の縄で人数の多い場合はこれを守り、出撃によって攻勢をとる。小人数の場合はこれを棄てる一種の捨て郭**「用捨の縄」**となり、二ノ丸以内が持久防御の陰の縄となる。三ノ丸は出撃を目的としていたため、＊**虎口**の＊**矢掛**の設備が少なく、門前に馬屯の広場を構えていた。

山崎　一『群馬県古城塁址の研究』下巻（昭和 53）群馬県文化事業振興会

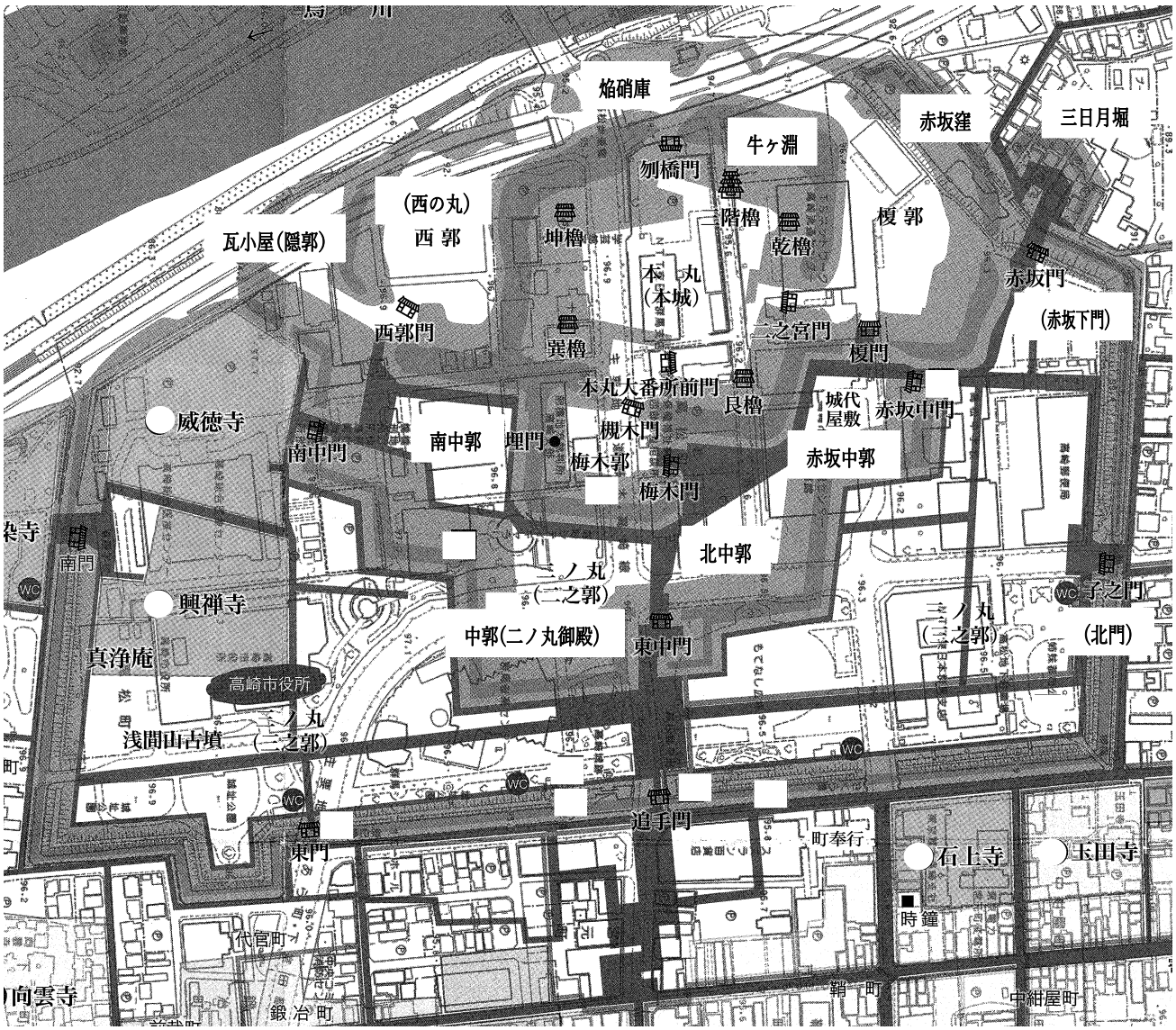
＊**中仙道**（なかせんどう）　中仙道・仲山道などの表記があったが、享保元年（1716）新井白石の意見で幕府により「中山道」と改められた。

＊**境目城**（さかいめじろ）　国境警備のための城。主要街道の要所となる場所が選ばれ、隣国へ侵攻するための拠点となった。高い防御力が必要とされ、軍事機能を優先して築城された。

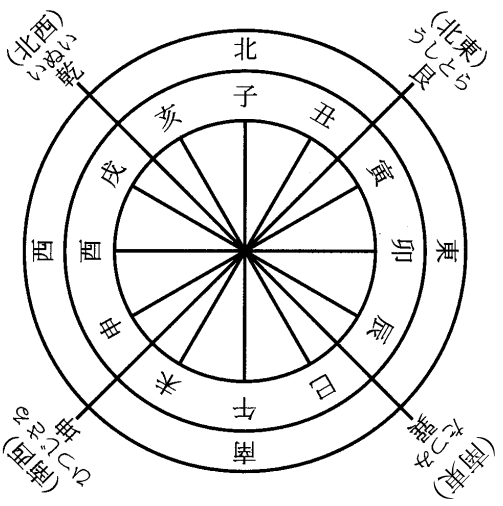
＊**縄**（なわ）　縄張（なわばり）。城のプランニング。

＊**虎口**（こぐち）　小口。出入口。城の出入り口。門周辺の橋・土居・櫓などの防御施設を含む。城へ通じる入口であるため、まず敵が攻撃する場所。敵の進撃を遮断し、攻防の焦点となることが多い。

＊**矢掛**（やがかり）　側面攻撃の仕掛け。



3．本丸を囲む□を○にする四隅の櫓と「六方正面」の門　高崎城の縄



*櫓は*郭の四隅に建てられた。隅櫓と呼ばれ、2方向を射程圏におさめることができる。**高崎城は東正面**であるため、西側の乾・坤の2つの櫓は東側の2つに比べて規模も小さかったが、正面の艮・巽の2つの櫓は立派に飾られ、鬼門の艮の方がやや大きかった。

「四隅に櫓を上げて四方を守るのは、方は四角に東西南北の四つを守る形で角に四つの隅あり、この四隅の*虚を守るために櫓を隅に上げて、**方を変じて円とする**」とある。また、「四隅に櫓を上げて郭内を守護し、櫓内に武器を込めて四方を守る便利とする。四方の櫓は武器配りで、高崎城のように「**六方正面**」の櫓は大いに城を守り、世の櫓に勝っている。もともと櫓は城を守る神、兵器は城を守る器である」という。特に鬼門に当たる艮櫓は石垣を築き、梅木・槻木・榎木・北中（赤坂中）・東中・二之宮門の6門は側面攻撃を意識した六方正面の本格的な*櫓門だった。

＊**櫓**　戦闘用の建物。古くは「矢倉」と書き、矢を納めた場所や射撃地点（矢座）。

＊**郭**　曲輪。近世には「郭」と書いた。一定の面積をもった平地。城では内部に多くの郭をもつ。城外から本丸までの間を複数の堀や土居で分けた区画で、外の城壁が破られても次の城壁で敵を防ぎ、繰り返し敵に打撃を与え、前進を遅らせて時間を稼ぎ、敵の犠牲を増加させる戦略「**縦深防御**」の考え方が基本になっている。

＊**虚**　備えのないこと。油断。すきがあること。

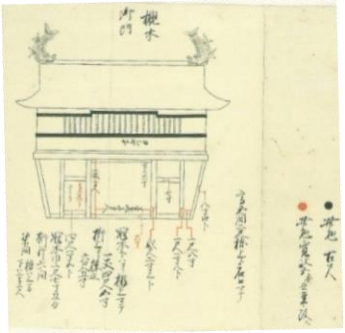
＊**櫓門**　敵を攻撃する仕掛けを備え、門の上が櫓になっている門。

本丸

高崎城は、本丸から次々と郭を繋げていく**輪郭式の縄張り**で、烏川に依存しつつも、城の面積を確保する総郭の城である。本丸には高さ7mの防衛のための土塁である「土居」がめぐり、当初は城主の御殿があったと見られているが、後に二ノ丸中郭の坪桝形が城主の居館となった。東・西・北の3ヶ所に門があり、築城当時は東だけが虎口で、他の2つは**＊埋門**だった。本丸は西側を榎郭と西郭、東側を二ノ丸が包む**「囲い付の縄」**である。土居上には三階櫓と乾・艮・巽・坤の4ヶ所に櫓があり、これらを**＊塗籠塀**がつなぐ**「極陰の縄」**であった。

＊埋門　土居の一部に設けた間道の小門で、土居上の塀は門の上をそのまま通り、幅3mくらいで少数の兵が出るのに用いられる。通常はそこから出撃しない、抜け道などでよく用いられた小さな虎口。敵に攻められた際に石や土で埋めて防ぐことができる。塀の下に門を開くことが多い。

＊塗籠塀　火矢などの攻撃や火災にもつよい壁を造るために柱を外に見せない造り。壁の仕上げに漆喰を塗る。



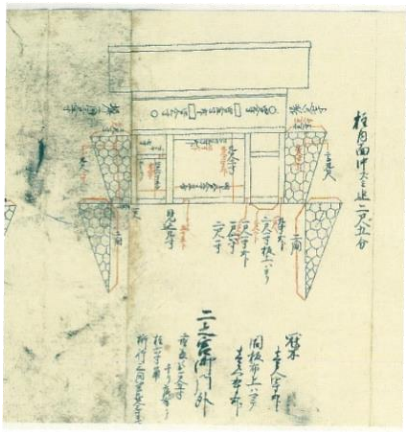
① 本丸の東の虎口　槻木門

槻木門は本丸の正門で、**箕輪城の＊追手門を移築**したと伝えられる。典型的な櫓門で、さまざまな工夫がなされた手本とすべき別格の門である。艮・巽の両櫓から横矢を払う**「両袖の櫓」**であった。**城中で最大の門**で、前面には梅木郭の**＊郭馬出**があり、北の梅木門と南の埋門の左右に虎口をもっていた。

＊追手門　城の正面を大手いう。「追手」とは城の裏側から兵を出し、敵を正面に追い込むことで、追手が大手に転化した。

＊郭馬出　外からは郭のように見えるが、実は城門の馬出としてつくられたもの。馬出は味方の人馬の出入りを敵方に知られないように城門の外に築いた施設。虎口の外側に設けた小さな郭。敵の侵入を阻み、出撃するときの拠点にもなった。

② 本丸の北の虎口二之宮門



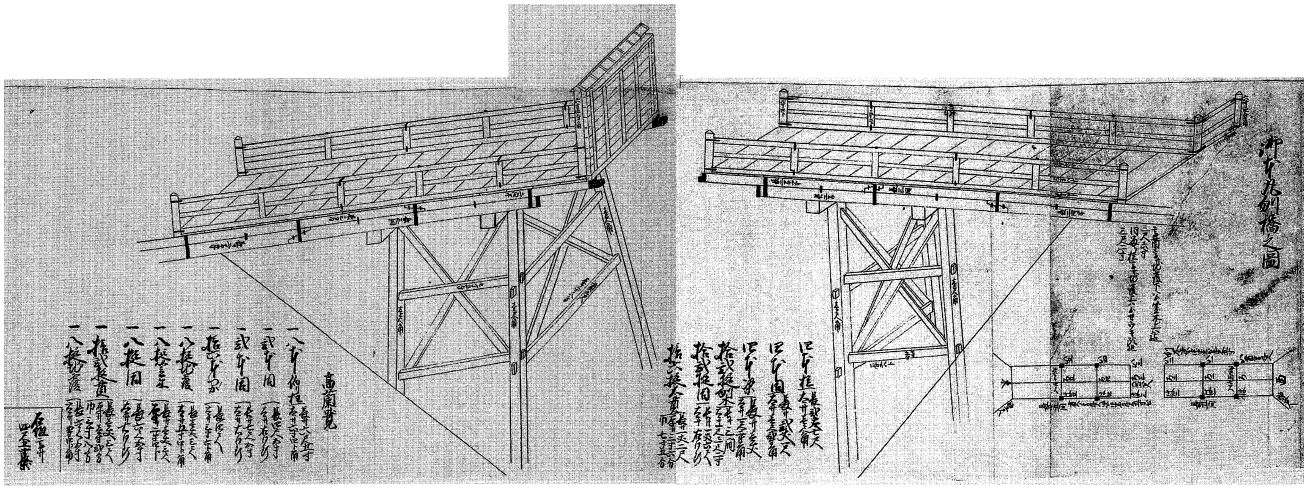
本丸の北門で、全面の榎郭（えのきぐるわ）に和田城時代からの**二之宮の社**があった。最初は**埋門**（うずみもん）だった。敵が榎門（えのきもん）の南の土居（どい）を占領した時に、門内を見透（みす）かされないようにするため、門の内側に*蔀（しとみ）土居（どい）があった。

＊蔀（しとみ）　城外から見えないように設けた城内の土塁・建物・植木など。

③ 本丸の西の虎口　*刎橋（はねばし）門

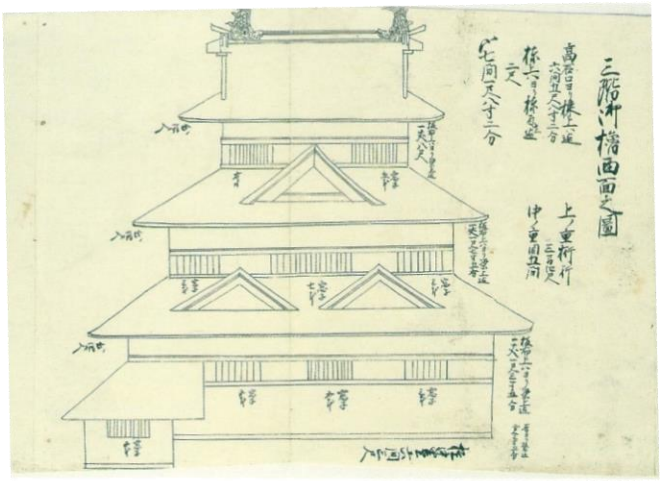
本丸の西門で、西郭（ぐるわ）に通じていた。最初は**埋門**（うずみもん）だった。門前に突き出した橋台があり、堀幅を狭くしてある。当時は普請（ふしん）（土木工事）が多く、橋は架けるだけになっていたが、費用がかかるため、部材は 30 年ほど榎郭（えのきぐるわ）の普請（ふしん）小屋にしまわれていた。

＊刎橋（はねばし）　引橋（ひきばし）。橋の下に車輪を付け、有事の際には城内に引き込む。橋の踏板を外すなどして敵の侵入を防いだ。門柱に滑車を付けて鎖などで引き上げる桔橋（はねばし）（跳橋）ではない。



○「**櫻井一雄家文書**」　平成 10 年（1998）に櫻井一雄氏から高崎市に寄贈された江戸時代中頃の高崎城に関する資料（市重要文化財指定「櫻井一雄家文書」）は、平成 18 年（2006）に高崎市が発行した「高崎市史資料集 1 高崎城絵図―「櫻井一雄家文書」を中心に―」でその全貌が紹介されている。

高崎城のシンボル 三階櫓



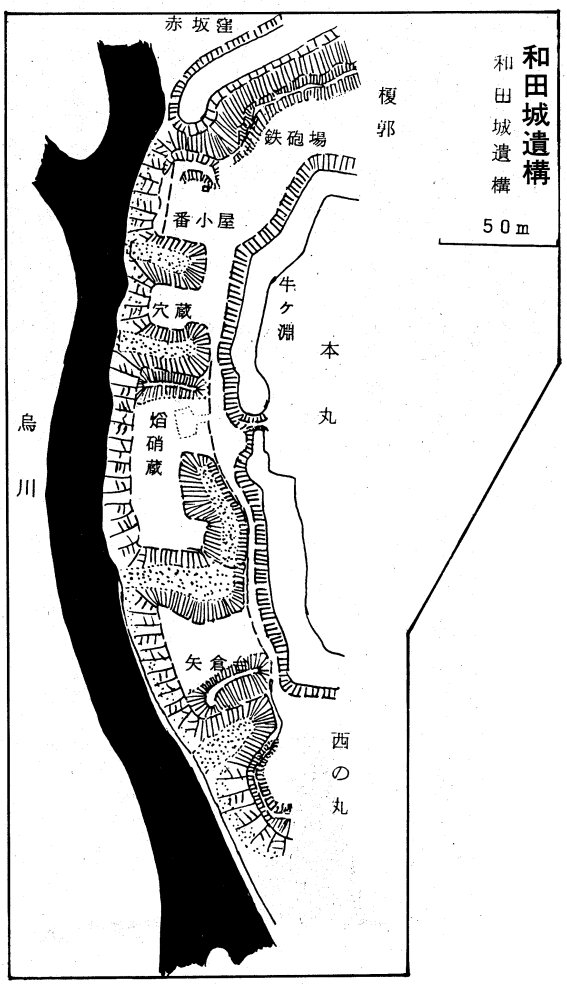
お櫓とも呼ばれた天守閣である。幕府が天守を築くことを禁じたため、櫓として認可を得ていた。

正面は東面、入口は南面にあった。正面の*千鳥破風は1階屋根に2基、2階屋根に1基であるが、2階正面の破風が最上階正面の展望を妨げ不利であることから、実戦より美観を重視していたと思われる。

4．烏川の崖の火砲の備え　北と北西からの攻撃に備える城

高崎城は、北または北西の方向が攻められることを想定している。高崎藩には806挺ほどの口径の大きい大砲などの火砲があり、試射場や町打ち（遠距離射撃）の台座も造られていたが、江戸時代末期まで実際に使われることはなく、幕末の東山道総督府に多くの武器や弾薬を献納した。

烏川は、毎年のように増水して洪水となり、崖を崩し、崖上の**焔硝蔵**や**焔硝穴蔵**、鉄砲場（鉄砲、大筒の試射場）などがその度に流された。



＊**焔硝蔵**　火薬の原料の硝石、硫黄などを貯蔵しておく蔵。

＊**焔硝穴蔵**　原料を調合する蔵か。

西ノ丸（西郭）

高崎城の本丸の回りを囲む西の細長い郭の構えは、**孫子九地編にある「両頭の蛇の形」**を具現したといわれ、首を西の丸とすれば尾は榎郭、体は西郭となる形である。西ノ丸は**和田城址**と考えられる。和田城は平地の崖端に用いられた**並郭式の縄**で、後の高崎城の焔硝庫（火薬庫）の場所が本丸、その南と北に第二郭があり、その外側に第三郭もあったようで、南北に別れた2郭を連絡づけていたと思われる。「此郭なき時は西山（観音山丘陵）より内を見すかし悪し。是、本城のかざしになる郭なり」という。

焔硝蔵（刎橋門の西の郭）の南の空堀からは、川を下り、水を利用し、渡河したという。西郭北端崖下には番所があり、天明（1781-1788）の頃には川が崖下に迫り、番所を崖上に移している。烏川は古くはここの崖下から離れていたが、文化14年（1807）頃には崖下に迫り、崖が時々欠けたらしい。川筋には竹木が茂り、4ヶ所の空堀に「**時の虎口**」が設けられて本丸土居と乾櫓・三階櫓・坤櫓の3つの櫓からの射撃で堅固な構えであった。

瓦小屋は隠郭という見方もある。敵を西郭に引きつけ、この郭から兵を出すほか、敵を誘い込み、西郭東側土居からの射撃と西郭門からの出撃によって退路を断つ、西郭南土居からの俯射によって攻撃するもので、「**生殺与奪**の縄」、または「**惑敵多端**の縄」ともいう。

＊**孫子九地編「両頭の蛇の形」**　常山の蛇勢。常山に棲む蛇は、首を打たれれば尾が助け、尾を打たれれば首が、胴を打たれれば首と尾が助けたという。先陣・後陣、左翼・右翼が攻撃・防御に協力し、敵に隙を与えないようにする陣法。

＊**時の虎口**　非常時の出入り口。

＊**生殺与奪**　生かすも殺すも、与えることも奪うことも自分の思うままになること。絶対的な権力を握っていることをいう。

＊**惑敵多端**　敵を惑わせ、多様に困らせること。

二ノ丸（二之郭）

戦斗正面は北東面・東面・東南面の３方で、**濠**・土居は**雁木折**になっていた。また、本丸が極陰の縄であるのに対し、二ノ丸は**陰陽兼帯の縄**である。北中門（赤坂中門）・東中門・南中門の３ヶ所の城門は横矢で掩護し、土居上の全面塗籠塀から強力な攻勢作戦がとれるようになっていた。

東北・東南の２ヶ所は「大**角欠**」で、兵の人数を節約できるが、土居の突角は弱点ともなるため、東北隅と東南隅の土居上には**櫓台**が設けられていた。郭内は赤坂中郭・北中郭・中郭・南中郭（仮称）の４分郭からなり、艮櫓下には「**時の虎口**」があった。中郭の坪桝形は城主の居館、北中郭は初期に城代屋敷となっていた。

＊**濠**　「堀」溝状掘削された防御構造物の総称。
「濠」堀の内で、水をたたえたものに特化する。水堀。
「壕」堀の内で、水を入れないもの。人を入れるもの。空堀。

＊**雁木**　空を飛ぶ雁のようなギザギザ形。

＊**折**　側面攻撃の横矢掛りを意識して、土居をギザギザの角が付いた形に造ったり、凸凹を設けたりして、土居線に屈曲を造ること。

＊**角欠**　鬼門除け。敷地や建物の北東の隅に角を作らないように凹（缺け」）を設けるものである。北東の隅を削り落として凹ませれば、角が無くなり、鬼門自体が消滅するという。

＊**櫓台**　虎口からの敵の侵入を警戒するためにつくられた土塁や石垣を積んだ高台。

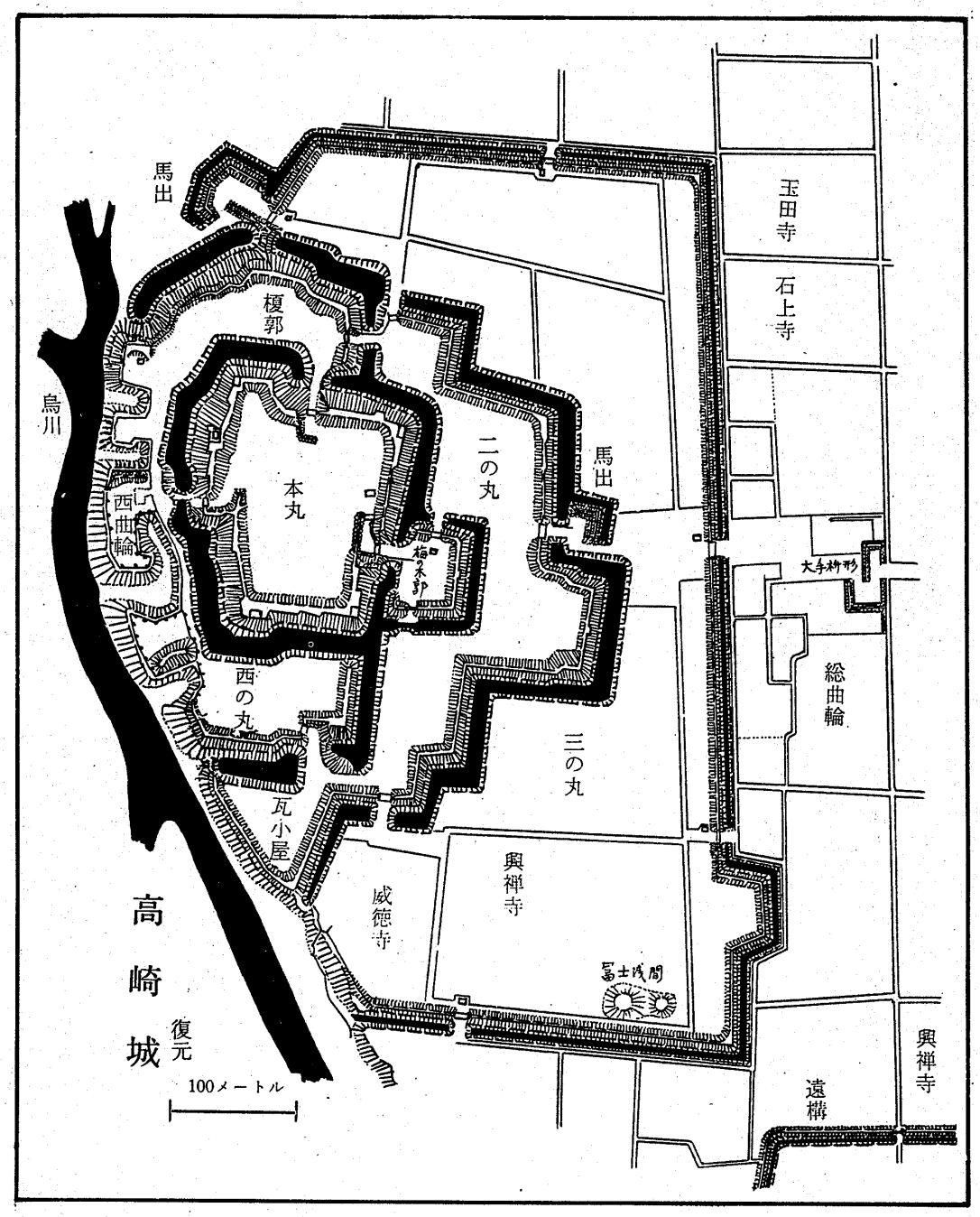
三ノ丸（三之郭）

三ノ丸は**陽の城の格**で防戦堅固である。城門は追手門のほかに赤坂下門・北門・東門・南門の４つの門が構えられ、東門の南側に桝形が突出していた。東面は追手門から500ｍもあるため、門が不足して東門は虎口になっていた。

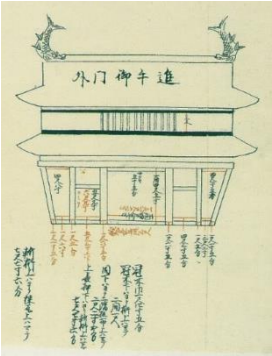
西南部の南中門外に**威徳寺**(いとくじ)があったが、廃城後、成田山光徳寺に移築された。この堂は、松平輝貞が日光の徳川綱吉廟(つなよしびょう)建造奉行の際に、設計の相違があり払い下げになったものである。

また、東南隅近くに**富士浅間**の古墳があり、兵営となる頃に崩され、内堀の埋め立てに用いられて消滅した。三ノ丸のほかの部分は武家屋敷だった。

赤坂下門は、三ノ丸の虎口の内では壮大な郭馬出(かくうまだし)で、西北面の中央が突き出した歪(ゆが)んだ五角形である。馬出(うまだし)の南の虎口(こぐち)には蔀土居(しとみどい)が築かれていた。



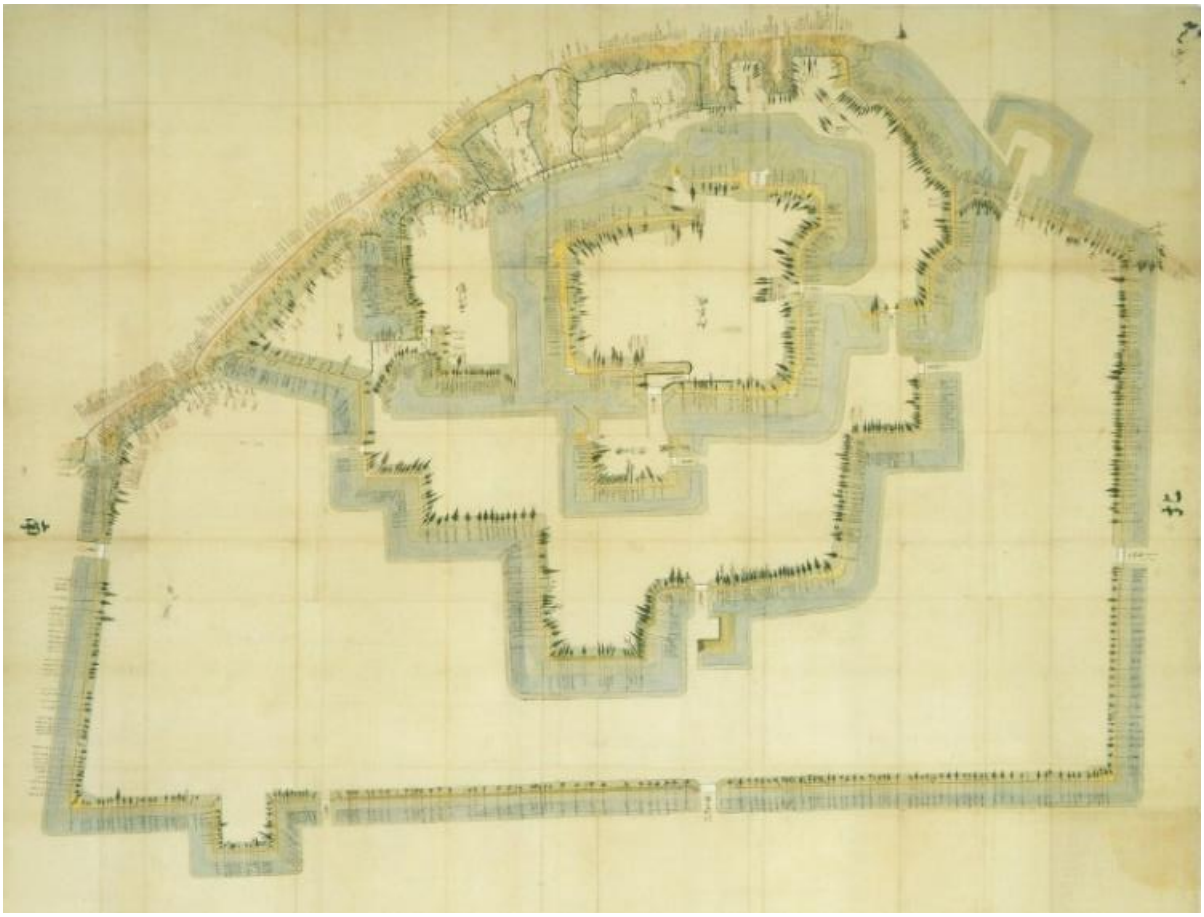
5．美観重視の正面　高崎城の顔　追手門（大手門）



追手門は高崎城の正門で槻木門に次ぐ規模の櫓門だった。高さ約 11m、高崎城第一の門であるため、通常は 2 階にお札を祀るが、後に物置となり、武器庫だったという。

『御城御土居通御植物木尺附絵図』

追手門の近くは松が多く、景観や美観を意識していたと考えられる。特に追手門から東門の間の土居は全て松で、武者走りを除けて法面に植えられていた。土居の樹木は土止めとなり、騎馬や車馬の通行を阻止し、弓矢や鉄砲の攻撃を防ぐための防衛や障壁となる。



『御城御土居通御植物木尺附絵図』文化 14 年 11 月下旬

「櫻井一雄家文書」高崎市教育委員会蔵

高崎城の土居に植えられたり、自生したりした榎・樫・欅・楢・栗・樟などの樹木について、１本１本詳細に記録された。１尺５寸以上の樹種・太さをすべて書き出している。